以下に、自身が留学を経験して学んできたメキシコの農業についての報告をさせていただく。卒業論文のテーマである、貿易を通したメキシコの農業の発展について、一年間実習や授業で学んできた。理解を深めていただきたいため、実際の活動の写真も掲載している部分が数か所ある。
初めに、メキシコ国内で出掛けたフィールドワークで取り扱ってきた農産物について、いくつか例を挙げる。コメ、アボカド、ベリー類、バナナ、パイナップルなど、実際に足を運び理解を深められたものを優先的に紹介した。また後半として、大学での授業、現地での生活に関する報告をさせていただく。

① フィールドワークで取り扱ってきた農作物

・コメ
メキシコは、世界でのコメの生産量は 58 位である（統計 118 か国中)。国民食タコスに添える具として主に食されている。主食として用いられることは少ないが、外せない食材の一つだ。筆者が訪ねた二件のコメ農家は、いずれも首都メキシコシティから東に車で 4 時間のプエブラ州に位置する。コメ栽培に必要な気候や土地が揃う。メキシコでは、コメは小規模で複数の農家に経営される場合が多い。コメの生育環境に適する地域は、メキシコ国内中央から南にかけて広がり、メキシコ北部に広がる大規模農業が行われずらいのが現状だ。これは、メキシコ州中央部プエブラ州へ水稲調査へ出かけた時の一枚だ。メキシコでの一般的な水田は、写真のように地面を掘って水を流す簡易水路のような区切りをもとに「水田」とし、日本のような明確な田んぼの概念はない。そこに土地があるから植えるという感覚だ。メキシコではコメは、国民食タコスに欠かせない具材として広く普及している。

・アボカド

　メキシコは、世界一のアボカド生産国である。起源は、メキシコアステカ時代に始まる。輸出国世界位置を誇る。アボカドはメキシコが原産で、中世にヨーロッパへと持ち込まれた結果、現在はシチリア海などの地域でトマトが生産されている。アボカド生産はメキシコ国内において、ミチョアカン州以北において広く栽培される。特にハリスコ州やプエブラ州といった適度な湿気や気温の栽培地には、大学の研修で何度も足を運んだ。個人で土地を所有し手作業で栽培を行う団体や、アメリカの農業団体が参入し、広大な土地を利用して大規模に行われ自社の工場と併設され大量に出荷されるタイプの生産体制など、零細から大規模までかなり多様なタイプが存在していたように思える。農園のタイプはハウスを使った露地栽培、南部の個人農家が行う露地栽培などがあげられる。

　写真は、筆者が訪れたハリス子週に位置するアメリカの外資産業が手掛けるアボカドの加工工場と農場の入り口の写真だ。

昨年 11 月の実習では、プエブラ州テシュートラン、ハリスコ州を訪れた。メキシコ国内でもアボカドの生産量一位を誇るミチョアカン州は、近年の治安悪化のため、訪問の予定が中止になったため調査を行うことが出来なかった。この工場では、内部は撮影禁止とされていたため外観のみを掲載している。大規模な慣行農園法が行われ、近年の健康食ブームの影響でアボカドの需要が高まり、大量生産にむけて人員、土地共に急がれて拡大が行われているようだった。ここでは、日本、アメリカ、ヨーロッパと主に先進国地域に向けて輸出がなされるメキシコ産のアボカドは、各地域のサイズや見た目などのニーズに合わせた生産も考えられているという。アボカドはメキシコの農産物の輸出を考える上でも、非常に重要な割合を占める農産物だ。今後の更なる輸出力強化に向けて、出荷パックの詰め方、収穫物の清掃、品種改良や寝室向上に向けた研究など、ある種の商品の販売強化に向けて取り組まれている、という印象を強く感じた。

・ベリー類（イチゴ、ラズベリー、ブルーベリー）

メキシコでは、ベリー類の果実の生産も盛んにおこなわれる。ラズベリー（フランボワーズとも呼ばれる）やブラックベリーなどは、メキシコ原産であり、現在も広い地域で生産が

続けられる。

https://www.huffingtonpost.com/gay-browne/the-berry-revealing-truth_b_9800682.html
ハフポストのベリーに関する投稿

メキシコ・サカテカス州の大規模ラズベリー生産団体、Driscoll's（ドリスコールズ）を見学。Driscoll's は、１８７２年にアメリカ・カリフォルニアで誕生したベリー類の生産を行う会社で、近年はアメリカ国内のみならず、メキシコ北部にも進出し生産の拡大を狙っている。年間 350 万トン程この農場で生産されるベリーの収穫物は、陸路でメキシコ国内へと運ばれていく。

また、アメリカの団体管轄の圃場では、このように廃棄の農産物もよく見られる。アメリカ国内に販売するにあたり、見た目や汚れなど、メキシコ国内に流通されるよりも厳しい基準で取引される。アメリカをはじめ日本など、先進国になるほどより完璧とされる形に近い状態でなければ取引してもらえないと経営陣の一人は語っていた。

・バナナ・パイナップル

DOLE 社のバナナ、パイナップル畑。メキシコ中部のコリマ州に位置する大規模な農場に足を運んだ。一念を通して温暖なこの州では、DOLE 社が数か所にかけて農場を展開している。写真は畑の様子と、収穫して出荷前の検品を行っている様子だ。目で見てその後、農薬の適切な使用基準を満たしているか、虫食いの被害はないか等およそ 30 か所の注意項目を経てから世界中へ出荷される。日本へも、chiquita banana（チキータバナナ）としてスーパーマーケットの店頭に並ぶことが多い。

※CIMMIT というトウモロコシとコムギの研究機関について

番外として、メキシコ最大の農業試験・研究上についても記載したい。CIMMIT というトウモロコシ・コムギの研究、栽培普及機関にも足を運んだ。写真の掲載は、許可等の関係のため割愛させていただく。ここでは、1940 年代から 60 年代までの緑の革命から現在に至るまでの、非常に豊富なトウモロコシ、コムギに関する資料が蔵されていたり、世界でも先進的な栽培普及や飢餓への対応に向けた農業研究が盛んにおこなわれている。研究者は世界各国から集められ、東京ドーム 37 個分の広大な敷地内で日々試験栽培や活動が行われていた。日本の学術機関とも交流が盛んにおこなわれており、実際に現地で研究を進める日本人スタッフもいらっしゃった。

メキシコには、南の熱帯地域や北では雪が降るような高山地帯も存在し、非常に豊かな気候を持つ世界的に見ても農業の可能性を持つ国だ。CIMMIT では今後、メキシコの広大な土地を生かし更なる農業発展のため、小規模、大規模メキシコの主な二つの農業をどう生かし、収益につなげ安定した作物供給を行っていくかにむけて日々研究を進めている。

① チャピンゴ大学での授業と活動

チャピンゴ大学では、前期、後期を通し聴講等を含め七つの授業を履修していた。主にメキシコや中南米で育てられる農産物に関して、栽培法から貿易状況に至るまで幅広く学んだ。特にメキシコの対アメリカ農産物貿易に関心があったため、アメリカに対する貿易状況を学んだり、アボカドやオレンジ、トウモロコシ、ベリー類など、施設を用いたアメリカ式の大規模な農業で行われる農業の実態を知るため、よく関連する授業に参加していた。授業はすべてスペイン語で行われ、初めはしどろもどろになりながらも、あえてその環境に身を置くことで語学力を身につけることが出来たと思う。

特に、自身が所属していた学部はフィールドワークが盛んに行われていたので、座学だけでなく実際にメキシコ各地へ農業の実態を見に行くことで、さらに深い知識の習得が出来た。メキシコでは治安が悪いとされている州や地域が多数存在し、機会がなければ足を運べない場所、学びに行けないことが多数あったため、非常に有難い制度であった。大学側が研修旅行に関する費用を負担してくれること、常に団体で行動できること、旅行や書物から学ぶだけでは限界があることなどを考慮すれば、是非今後も留学に行かれる方々には利用を積極的にしてほしいと考える。また授業や研究の内容によっては、近隣国のアメリカやコロンビアと、国を超えた研修も用意されているようなので、今後チャピンゴ大学へ留学へ行かれる学生には、是非このフィールドトリップ実習で、メキシコや周りの諸国との関係への理解を深めてほしい。

授業を行う教授や学部も、比較的親身になって普段の勉強のサポートをしてくれる。ただ言葉の壁がネックになり、自分の学びたいことやもっとこうしたいという意思を伝えられない自分は結構苦しむことも多かった。テストや実習も、留学生とはいえその場所にいれば一生徒に変わりないので、特別扱いされることはほとんどない。知らないことがあれば、自分で先に予習しておく。実験やゼミの参加などの連絡の際に、適当な対応を受けやり取りが困ってしまう方も数名いらっしゃったが、先を読み自分で行動する習慣をつけ、自身の学びに対する管理はしっかりしようと心掛けていた。また個人的な話だが、日本では農作業中に薬品を使うことがあれば防護服を着たり安全への配慮をして臨むところもメキシコでは一概にすべてそうとは言えない。また、素手で植物に触れることも多かった。なので授業中、農薬がまかれていることを知らずに畑で作業していた際、具合が悪くなったこともあった。郷に入っては郷に従えというが、自分の身は自分で守らなければいけないので、些細なことだがもう少し大学側には作業への配慮が欲

しいなと感じたこともあった。

授業では、頻繁にテストや実験、実際に大学近隣の畑に出て栽培実習が行われる。学生たちは日頃から本当によく勉強していた。日本の大学は、入ることが難しいが卒業することは割と易しいように感じる。だがメキシコでは逆で、卒業するために学生たちは本当に必死に勉強していた。そして、学ぶことが好きで、授業でも講義に聞き入り、真剣にディスカッションしながら理解を深めていく様子には、自分も改めて見習わなければいけないと強く感じた。メキシコは、決して全員が豊かに暮らしているといえる国ではない。だからこそ、この大学に通っている多くの学生も、日頃から親に感謝し、学ぶことが出来る喜びをちゃんと感じながら生活していることがとても印象的であった。

② 大学での生活

大学では学生の生活へのサポートも徹底しており、勉学に集中できる環境が整えられていた。住むのはアパートタイプの寮で、各国から来る留学生たちと共同で暮らす。文化や生活スタイルが異なることで、中々一筋縄にはいかないことも多かった。だがそれを経験したからこそ、他者への深い理解を得られたのだと思う。

普段の学内での生活に関して、留学生も同等にそれらのサービスを受けられる。食堂や図書館、フィットネスクラブやスポーツクラブへの加入など、日々非常に充実した日々を過ごすことが出来た。毎週末学内では無料の映画鑑賞会やダンス会が開かれていたり、季節によってイベントも行われていたりと、メキシコの文化を学べたり仲間との交流もでき非常に参加できてよかった。特に、留学生であった自分にとって一番心強かったことは、大学に併設されている病院が 24 時間開いており、無料で利用できる点だ。合わない食事や食当たりの際も、すぐに対応し薬も無料で処方していただいた。稀に処方のミスや、日本人の体には少し強い薬を出された場合にも気を配れば、大学で困ったことはすべて解決していた。

一番留学で心配なことは、その土地をよく知らずに生活を送ること、言葉の壁などだと思う。だが、そんな際も周りにいる大学の生徒や同大学で教鞭をとられる日本語教師の方々、同市や首都に住まわれ活躍される農大の卒業生の先輩方など、いつも周りで自分たちを見守りサポートしてくれる仲間がいたため、難なく一年間の留学生活を送ることができた。